様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目:基盤研究(B)
研究期間:2006～2008
課題番号:１８３１０１７１
研究課題名(和文)
日本の宗教とジェンダーに関する国際総合研究—尼寺調査の成果を基礎として—

研究課題名(英文)
International Research on Japanese Religions and Gender : Using the Results of Surveying Convent Archives as a Foundation

研究代表者
岡 佳子(OKA YOSHIKO)
大手前大学・総合文化学部・准教授
研究者番号 50278769

研究成果の概要:

本研究は、古代から近代の日本の女性たちが宗教者あるいは信仰者として果たした社会的・文化的な役割を日本における尼寺調査と研究会活動を通じて明らかにし、諸外国の事例と比較して宗教とジェンダー研究に新展望ともたらすことを目的に、①京都・奈良の尼門跡寺院を中心にした尼寺の総合悉皆調査、②古代から近代にいたる日本女性と宗教の問題をテーマにした諸研究、③海外研究者を招聘しての調査研究および米国での国際シンポジウムを開催が主要な活動であった。尼寺調査は 1999 年度からの継続活動だが、当該期間中に 7 回の調査を実施し、霊鑑寺 3370 件、中宮寺 4358 件、慈受院 4318 件、道明寺 320 件の調査データを目録化した。その結果、近世・近代の尼寺研究の基礎資料を学界に提示することができた。本研究に参加した研究者は古代から近代にいたる日本女性と宗教の問題をテーマに研究を深化させ、加えて 2007 年 11 月には、米国ハーバード大学において、ライシャワー日本研究所と共催で“BEYOND BUDDHOLOOGUY:NEW DIRECTION IN THE STUDY OF BUDDHISM”“WOMEN AND THE HISTORY OF JAPANESE BUDDHISM”を開催し、11 名が発表した。その内容は、日本仏教史はもとより、美術史や東洋史にまで及び、日本における当該研究の多様性を提示し、参加した在米研究者との間に活発な討議が交わされた。最終的に、諸論考、国際シンポジウムの発表概要、文書目録を掲載した研究成果報告書を刊行した。本研究により、女性の手による女性のための一括ジェンダー資料である尼寺文書調査の成果を日本の宗教史研究に位置づけ、日本から発信して国際的な研究成果を得ることできた。

交付額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2007 年度	7,800,000	2,340,000	10,140,000
2008 年度	3,300,000	990,000	4,290,000
年度			
年度			
総　計	14,600,000	4,380,000	18,980,000

研究分野:ジェンダー
科研費の分科・細目:ジェンダー
キーワード:ジェンダー・尼寺・宗教・女性・比丘尼御所・中宮寺・慈受院・霊鑑寺

１．研究開始当初の背景

本研究にいたるまで、1999 年から科学研究費補助金を得て尼門跡寺院の文書調査を活動の中心とした下記の研究が行われた。

「中・近世文書にみる尼門跡寺院の歴史的変遷と生活文化、尼僧の信仰研究」、基盤研究(B)、1999～2002 年度、1141009、研究代表者:相愛大学教授 西口順子

尼門跡寺院は近世に皇女・王女・公家の子女が入寺した比丘尼御所を前身とする尼寺で、京都の大聖寺・宝鏡寺・光照院・曇華院・霊鑑寺・林丘寺・慈受院・三時智恩寺・宝慈院・本光院・瑞龍寺(現滋賀県)、奈良の円照寺・中宮寺・法華寺である。その多くが多量の近世・近代文書を所蔵し、また尼僧の信仰生活と文学・芸能・美術などの宮廷文化が明確になる多量の資料が保存されている。

研究代表者西口順子は、1998 年度に相愛大学特別研究助成(課題名「尼門跡寺院の調査と研究」)を得て、光照院門跡の予備調査を行ったが、その成果をもとに、岡佳子(大手前大学)・牧野宏子(関東学院大学)を研究分担者として本格的な尼門跡調査を開始した。

本研究では光照院門跡に残る近世・近代文書約 1500 点、絵画・書跡・陶磁器等の美術品調査を行った。さらに、2000 年度から霊鑑寺門跡の調査を始め、約 1500 点の文書を調査し、2001 年度には中宮寺門跡の予備調査を実施した。文書調査では詳細な調査表を作成し、調査後にデータをパソコン入力した。本研究では、光照院文書調査をほぼ終了したが、霊鑑寺・中宮寺の調査は完了せず課題として残った。

「尼寺文書調査を基盤とした日本の女性と仏教の総合研究」、基盤研究(B)、2002～2005 年度、14310165、研究代表者:岡佳子

前研究において、尼門跡の文書調査では一定の成果を得たが、近代へと視野を広げる必要性、美術工芸品調査の必要性、仏教儀礼における尼僧の役割を明確にすること、尼門跡と他の一般尼寺と比較、古代・中世の女性と仏教の研究成果へのリンクなどの新しい課題が生じてきた。

これら新課題を盛り込む形で、岡佳子を研究代表者に、研究分担者として西口順子・牧野宏子、前研究で研究協力者であった岡村喜史(龍谷大学)、中世仏教史専攻の牛山佳幸(信州大学)・原田正俊(関西大学)、近世政治史の杣田善雄(大手前大学)、近代文化史の高木博志(京都大学)、美術工芸史の切畑健(大手前大学)、中国仏教史の松浦典弘(大手前大学)を研究分担者に加えて研究組織を構成した。

本研究では、中宮寺・霊鑑寺の 2 ヶ寺の尼門跡の調査を継続し、2003 年度より慈受院門跡を調査に加えた。その結果、中宮寺で約 2400 点、霊鑑寺では約 2000 点、慈受院では約 1800 点の文書を調査することができた。

本研究では、霊鑑寺調査はほぼ終了したが、中宮寺と慈受院調査は完了せず課題として残った。また全 7 回の尼寺文書研究会を開催して、古代から近代までの女性と仏教と女性に関する 13 の報告を行った。最終的には論考と光照院文書目録を収載した報告書を作成し、その成果を公開した。

1999 年度から 2005 年度に至る、過去 7 年間の活動によって、尼門跡調査と日本の女性と仏教の研究活動において成果をあげることが新たなる課題が生じた。

第 1 は中宮寺と慈受院の両尼門跡の文書調査が終了せず、中途で残したことである。第 2 は尼門跡文書が女性の手による一括文書との性格をもつため、その分析は宗教におけるジェンダーの問題にテーマとすることができることが明確になったことである。第 3 は文書調査に参加した海外研究者との交流を通じて宗教とジェンダーを課題とした国際総合研究の可能性が見出されたことである。

そのため、前研究の分担者に、中世仏教史の平雅行(大阪大学)、古代仏教史の勝浦令子(東京女子大学)・吉田一彦(名古屋市立大学)、日本絵画史の原口志津子(富山県立大学)、さらに研究協力者であった佐藤文子(佛教大学)、これらの諸分野にわたる研究者を加えて研究組織を再組織し、女性の手による女性のための一括ジェンダー資料である尼寺文書調査の成果を日本の宗教史研究に位置づけるとともに、日本から発信して国際的な成果を目指すという目的をもつ本研究の実施に至ったのである。

２．研究の目的

本研究は、古代から近代の日本の女性たちが宗教者あるいは信仰者として果たした社会的・文化的な役割を日本における尼寺調査と研究会活動を通じて明らかにし、それをアジア・ヨーロッパなど諸外国の実態と比較して宗教とジェンダー研究に新展望をもたらそうとするものである。そのために①京都・奈良の尼門跡寺院を中心にした尼寺の総合悉皆調査、②古代から近代にいたる日本女性と宗教の問題をテーマにした諸研究、③海外研究者を招聘しての調査研究および米国での国際シンポジウムを開催、この三方向から調査研究を行い、女性の手による女性のための一括ジェンダー資料である尼寺文書調査の成果を日本の宗教史研究に位置づけると

ともに、日本から発信して国際的な成果を目指すことを目的とした。

３．研究の方法

(1)研究の役割と研究テーマの設定

研究代表者・研究分担者・連携研究者は、本研究における役割と古代から近代にいたる日本女性と宗教の問題に関する研究テーマを設定し、日本と宗教とジェンダーに関わる研究を行った。

研究代表者：岡佳子(研究の統括、近世文書・美術工芸資料の調査担当、近世・近代の比丘尼御所の組織と編成・女性と工芸の研究)、

研究分担者・連携研究者：西口順子(研究指導、日本の女性と仏教研究)・切畑健(美術工芸資料調査担当、近世比丘尼御所の美術工芸・古代中世の尼寺所蔵の美術品の研究)・杣田善雄(近世文書調査担当、近世の門跡と比丘尼御所の比較研究)・牧野宏子(国文学資料・民俗調査担当、尼寺の文芸にみるジェンダー・比丘尼御所の生活文化研究)・平雅行(古記録調査担当、中世仏教と女性研究)・勝浦令子(古記録・民俗調査担当、古代・中世の女性と仏教研究)・牛山佳幸(近世文書調査担当、中世尼寺の存在形態・中世寺院における女人禁制の研究)・吉田一彦(古記録調査担当、古代仏教の性差に関する研究)・原田正俊(仏典・仏教資料調査担当、中・近世の禅と女性研究)・高木博志(近代文書調査担当、近代天皇制下における尼門跡の研究)・原口志津子(美術資料調査担当、日本絵画のジェンダー研究)・岡村喜史(近世文書調査担当、近世尼寺の変遷と尼僧の信仰の研究)・佐藤文子(近世・近代文書調査担当、古代の僧と尼僧研究)、松浦典弘(仏典・仏教資料調査担当、唐代の女性と仏教研究)

(2)尼寺調査の実施

本研究に参加した研究者は、(1)に述べた役割分担に基づきに京都府の霊鑑寺・慈受院、奈良県の中宮寺の 3 尼門跡寺院、大阪府の道明寺調査を実施した。中宮寺・慈受院は古文書、霊鑑寺は美術品(書跡・絵画)、道明寺は仏教資料を調査対象とした。

調査方法は文書 1 点ごとに調査書を作成、題名・法量・体裁・内容などのデータ採取し、調査後に写真撮影を行った。調査後、採取データはパソコンに入力してデータベースを作成、最終的に目録化した。

(3)尼寺文書研究会の開催

本研究に参加した研究者は、(1)の各自のテーマをもとに深めた研究の成果を尼寺文書研究会において報告した。研究会では 2～3 名の報告者が報告を行い、参加者全体の討議を行った。

(4)海外研究者の調査参加と国際シンポジウムの開催

日本の宗教とジェンダーに関する国際研究を目的に、(2)の尼寺調査に海外の研究者を招聘した。

2007 年には国際シンポジウム“BEYOND BUDDHOLOOGUY :NEW DIRECTION IN THE STUDY OF BUDDHISM”(仏教学を超えて:日本仏教学の新しい方向)を開催、本研究の研究者 11 名が参加し、米国ハーバード大学において報告を行った。

これに先だち 2006 年 12 月に、京都で阿部龍一(ハーバード大学教授)と協議を行い、内容・日程・要項に関しての詳細な打ち合せを行い、参加者と題目の大概を討議した。2007 年夏には発表者は発表概要を執筆して提出、その概要に対して海外研究者がコメントを作成した。それらを纏めた資料集を作成してシンポジウムに臨んだ。

(5)研究成果報告書の作成

最終年度 2008 年度には、尼寺調査、尼寺文書研究会、国際シンポジムウムの成果をもとにした研究報告書を作成した。

４．研究成果

(1)尼寺調査の活動とその成果

尼門跡を対象とする調査は、1999 年度から開始した「中・近世文書にみる尼門跡寺院の歴史的変遷と生活文化、尼僧の信仰研究」から継続する研究活動である。

2006 年度には中宮寺(2006 年 9 月 4 日～9 日・2007 年 2 月 25 日～3 月 3 日)・慈受院(2006 年 8 月 6 日～10 日)の 3 回の古文書調査、霊鑑寺を対象にする第 1 回美術品(書跡・絵画)調査(2007 年 3 月 21 日～23 日)を実施した。その結果、慈受院調査を終了した。

2007 年度は、中宮寺の調査を実施し、(2007 年 8 月 2 日～8 日、11 日～16 日)、調査を終了した。本調査では、国際共同研究を目的にボストン大学助教授 Gina Cogan が参加した。また慈受院門跡の日記撮影も行い、大阪府藤井寺市の道明寺を対象に、研究分担者原田正俊を中心に、予備調査を実施した(2007 年 12 月 4 日・5 日)。

2008 年度は、霊鑑寺の第 2 回美術品調査(2008 年 9 月 19 日・20 日)と、道明寺文書調査を実施し(2008 年 7 月 28 日～30 日・10 月 20 日)、南カルフォルニア大学助教授 Lori Meeks が後者に参加した。

調査後に霊鑑寺・慈受院・中宮寺の 3 ヵ寺のデータ入力を行うとともに、調査データの内容検討と目録完成にむけて 2007 年度 1 月から 2008 年度にかけ、全 10 回の尼寺文書調査検討会を実施した(2008 年 1 月 6 日～8 日、2 月 20 日～21 日、5 月 19 日・6 月 2 日・6 月 30 日・9 月 29 日・11 月 10 日・11 月 29

日・12 月 15 日・12 月 23 日)。

霊鑑寺は江戸初期に後陽成院の女房藤原孝子の閑居地であったが、承応 3 年（1654）に後水尾院皇女初代月江宗済が入室・得度し比丘尼御所となった。2 代に後西院皇女光山宗栄を迎えて以後、幕末まで伏見宮・閑院宮家の息女を住持に迎えた。調査データは 3370 件で、内日記 186 件、書籍 52 件であった。文書の大半は 18 世紀後半以後、3 代祥山宗真時代からのもので、ことに近代文書が多く 7 割を占め、維新の激動期を経て旧比丘尼御所が尼門跡として再生する過程が明確になる。また歴代の霊鑑寺宮、天皇や院の書跡類、近江の比丘尼御所禅智院関係文書も残る。

慈受院も京都の旧比丘尼御所で維新後に廃寺となったが、大正 8 年(1919)年に、同じ総持院が慈受院を復興・合併し慈受院と名乗った。そのため文書の大半は総持院文書である。総持院は室町時代 4 代将軍足利義持の妻、竹庭瑞賢を開基とする尼寺で、花山院家息女 8 代英山周賢の時代、元和 2 年(1617)に江戸幕府から朱印知 78 石余を安堵され比丘尼御所となり、以後、花山院家の息女が近衛家の猶子となって入室し維新をむかえた。調査データは 4318 件で、内 153 件が触留帳、日記 182 件である。文書群は 18 世紀中期、13 代天山瑞浩から以後のもので、近代文書も多い。花山院・近衛家関係文書、天明大火後の復興関係、寺領関係文書および禁裏や近衛家の女性たちの仮名消息が多く残る。触留帳は元禄 11 年(1698)、日記は正徳元年(1711)以降が残るが、ことに触留帳は、武家伝奏を通じて比丘尼御所に下された公儀触を写したもので、江戸幕府の支配の状況が明確になる貴重な史料群である。

中宮寺は創建は古代にまで遡る尼寺である。中世には一時衰退したが、室町後期に伏見宮家皇女高祐尊智が入室して復興し、近世にいたると後西院皇女高栄尊秀が入室し宝永 4 年(1707)に 46 石余が寄進され比丘尼御所に列し、以後、伏見宮家・有栖川宮家の子女が入室した。調査データは 4358 件で、全て近世中期以後の文書で、近代文書も多い。遠忌関係を中心に歴代住職関係文書が多量に残り、天誅組や駆込関係などの在地との繋がりが明確になる文書も認められ、近代の改宗や宝物関係文書からは近代に「飛鳥の寺」再生する中宮寺の姿が浮き彫りになる。

上記の 3 ヶ寺は旧比丘尼御所だが、河内道明寺は朱印知 149 石余を領していたものの、近世に比丘尼御所に含まれず、一般尼寺として推移した。文書はかって藤井寺市史編纂室が調査したが、本研究では、その折に対象外にされた聖教・典籍の部分調査を行い、320 件データの目録を作成した。道明寺には西大寺流の戒律・密教に関わる聖教、寺内で行われた天神講・往生講などの講式が多数残り、尼僧の活発な修行・宗教活動が明確となった。

(2)尼寺文書研究会の活動とその成果

尼寺文書研究会は、2003 年度から開始された「尼寺文書調査を基盤とした日本の女性と仏教の総合研究」から継続する研究活動である。

本研究においては、第 8 回、高木博志「近代京都と国風文化・安土桃山文化」(2006 年 7 月 2 日)、第 9 回、岡佳子「比丘尼御所の組織—円照寺を中心に—」・原口志津子「富山市八尾・本法寺蔵『法華経曼荼羅』と女人往生」(2006 年 12 月 7 日)、第 10 回、佐藤文子「聖と優婆夷」(2007 年 3 月 21 日)、第 11 回、牛山佳幸「女人禁制の日本的展開」、西口順子「女性と仏教研究と日本仏教史」(2007 年 5 月 6 日)が行われた。これらは研究代表者、分担者の報告であったが、第 12 回では連携研究者:岸本香織「慈受院文書について」研究協力者:水谷友紀「中宮寺文書について」青谷美羽「近代の尼門跡について」の報告が行われた(2008 年 11 月 29 日)。

尼寺文書研究会は参加研究者の研究成果に基づく研究報告であるが、第 9 回～11 回は国際シンポジウムの準備報告であり、第 12 回は報告書作成に向けての報告であった。

(3)国際シンポジウムの開催とその成果

本研究では、国際シンポジウム “BEYOND BUDDHOLOOGUY:NEW DIRECTION IN THE STUDY OF BUDDHISM(仏教学を超えて:日本仏教学の新しい方向)を開催した。期日は 2007 年 11 月 2 日・3 日、場所は米国ハーバード大学、ライシャワー日本研究所と、大阪大学荒木浩・井伊春樹を研究代表者とする科研プロジェクトとの共同開催である。

本研究の研究代表者・研究分担者は第 1 日目 WOMEN AND THE HISTORY OF JAPANESE BUDDHISM において、下記のように日本の古代から近代史、さらに中国史、美術史の多岐にわたる発表を行った

KEYNOTE ADDRESS

西口順子「女性と仏教研究と日本仏教史」

第 1 パネル「宗教とジェンダー」

Chair: James DOBBINS, Oberlin College

勝浦令子 「女性と穢れ観」

牛山佳幸 「女人禁制の日本的展開」

高木博志 「古典文学と近代京都ー名所の女性化」

Respondent: Lori MEEKS, University of Southern California

第 2 パネル「尼僧の歴史」

Chair: Jacqueline STONE, Princeton University

松浦典弘 「唐代女性の出家形態 —寺院との関係を中心にー」

佐藤文子 「優婆夷から聖へ」

平雅行 「出家と女性」
Respondent: PaulGRONER, University of Virginia
第 3 パネル「尼寺とその周辺」
Chair: Barbara AMBROS, University of North Carolina
原田正俊 「禅宗の尼寺と女性」
岡佳子 「近世比丘尼御所の組織」
Respondent: Gina COGAN, Boston University
第 4 パネル「美術・工芸資料にみる女性の信仰」
Chair: Anne Nishimura MORSE, Boston Museum of Fine Arts
吉田一彦 「天寿国曼荼羅繍帳と女性」
原口志津子「法華経曼荼羅と女人成仏」
Respondent: Kevin CARR, University of Michigan

第 1 日目は、本研究の発表者の報告であったが、2 日目には円卓会議が行われた。ここでは各パネルの Chair が、報告内容に関してコメントし、会議参加者による全体討論が行われ、日本及び海外研究者間で、日本の宗教とジェンダーにおける諸問題が討議された。

(4)成果報告書作成とその成果

本研究では、下記の 4 分冊の研究成果報告書を作成し、2009 年 3 月 31 日付で公刊した。

『平成 18～20 年度 学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書 本の宗教とジェンダーに関する国際総合研究―尼寺調査の成果を基礎として』

Ⅰ本文編　全 202 頁
Ⅱ霊鑑寺目録　全 211 頁
Ⅲ中宮寺目録　全 282 頁
Ⅳ慈受院目録　全 259 頁

『Ⅰ本文編』には岡佳子が研究概要を執筆、論考編に西口順子「日本の女性と仏教史研究」(東方学会『ACTA ASIATICA』98 号掲載原稿の日本語版)、吉田一彦「天寿国曼荼羅繍帳の人名表記」(『アリーナ』第 5 号掲載論文の再録)、岡佳子「能書、宝鏡寺徳嚴理豊と近江善隆寺」、青谷美羽「近代の尼門跡」、原田正俊「道明寺文書について」の 5 編の論考を掲載した。

西口・吉田の論考は国際シンポジウムの発表内容をもとに成稿されたものであり、岡・青谷の論考は、尼門跡所蔵の文書をもとに近世・近代の比丘尼御所について論じたものである。原田論考は、道明寺調査の状況とその成果である。

『Ⅰ本文編』には、国際シンポジウムの内容を再現するために、発表者がシンポジウムの事前に提出した発表概要に加筆した論考 11 編、および阿部龍一による翻訳とともに Respondent のコメント 4 編を掲載した。また、第 3 パネルの Chair であった Barbara Anbros からコメントが寄稿され、田中紀子がこれを翻訳した。

『Ⅱ霊鑑寺文書目録』では岡佳子が目録の校訂を行い、岡村喜史が解題「霊鑑寺文書について」を執筆した。『Ⅲ中宮寺文書目録』では校訂と解題「中宮寺文書について」を研究協力者水谷友紀が執筆した。『Ⅳ慈受院目録』では、校訂と解題「慈受院文書について」を連携研究者:岸本香織が担当した。

(5)本研究の意義と課題

「2．研究の目的」で述べたように、本研究の活動は、①尼門跡寺院を中心にした尼寺の総合調査、②日本の女性と宗教の問題をテーマにした諸研究、③海外研究者の調査への招聘と国際シンポジウムを開催であった。

① については、本研究により 1999 年から継続してきた霊鑑寺・中宮寺・慈受院の 3 ヶ寺の調査を終了し、近世・近代文書の目録を作成して公開した。この意義は大きい。文書群は寺院ごとに特色をもつが、共通して近世・近代の尼僧が思想や行動を、女性自らの手で具体的に記述している。尼僧たちは自らの救済のため信仰を深め、尼寺を維持・経営するため積極的に社会に関与した。さらに比丘尼御所の周辺には、在地の群小尼寺の尼僧、一般女性が信仰を求めて参集した。河内道明寺調査によって、近世の一般尼寺の尼僧たちもまた積極的に宗教活動を行ったことが明確となった。

従来の日本の女性と仏教研究は、古代・中世史に偏っていたが、本研究によって近世・近代の尼寺研究の基礎作業が完了したと位置づけることができる。

② ③の課題にも多くの成果があった。本研究に参加した研究者は、古代から近代にいたる日本女性と宗教の問題をテーマにした研究を深化させ、その成果を国際シンポジウムにおいて報告した。日本側の発表者は歴史学研究者を中心としたが、その内容は美術史や東洋史にまで及び、日本における当該研究の多様性を提示することができた。一方、Chiar や Responden として参加した在米研究者からは、従来の日本の研究とは異なったユニークな視点をもつ多彩な意見が提示され、活発な議論が交わされた。このように、日本の宗教とジェンダーの問題が日米の研究者間で討議された意義深い。また本研究では海外若手研究者が尼寺調査に実際に参加し、日本研究者との間に交流をもち、国際研究としては多くの成果があった。

これらの成果を研究成果報告書として公刊した。また各研究者も論文化しつつあるが、本研究には残された課題は多い。調査は尼門跡寺院の一部にすぎず、残された尼寺は多い。またこれらの史料をもととして、近世・近代の日本のジェンダーと宗教の研究を深化さ

せることも、残された課題である。さらに、目的のひとつに本研究の成果を調査と研究会活動をアジア・ヨーロッパなど諸外国の実態と比較することがあった。しかし、それも果たせていない。

５．主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 32 件)

①岡佳子、「〈京焼〉考」、『陶説』第 664 号、178～191 頁、2006 年、査読無
②岡佳子、「近世京焼の変遷」『近世都の工芸—京の美意識と匠の世界』、京都文化博物館、6～11 頁、2007 年、査読無
③岡佳子、「兵庫県の陶磁器の近代—内国勧業博覧会関係史料を中心に—」、『大手前大学オープン・リサーチ・センター研究報告書第 6 号』、9～25 頁、2007 年、査読無
④岡佳子、「茶会記にみる〈今ヤキ〉と〈京ヤキ〉」、『藝能史研究』第 180 号、1～16 頁　2008 年、査読有
⑤岡佳子、「桃山から江戸時代初頭の茶陶流通と京都」、『藝能史研究』第 181 号、16～30 頁　2008 年、査読有
⑥岡佳子、博士論文「近世京焼の研究」筑波大学人間総合科学研究科提出、博士(芸術学)授与、2008 年、査読無
⑦岡佳子、「能書、宝鏡寺徳嚴理豊と近江善隆寺」、『平成 18～20 年度、科学研究費補助金(基盤研究(Ｂ))研究成果報告書　日本の宗教とジェンダーに関する国際総合研究—尼寺調査の成果を基礎として　Ｉ本文編』19～29 頁、2009 年、査読無
⑧西口順子、「日本の女性と仏教史研究」『同上』、47～65 頁、2009 年、査読無
⑨杣田善雄、「禁中並公家中諸法度〈座次規定〉と朝幕関係」、『日本史研究』第 542 号、26～53 頁、2007 年、査読有
⑩平雅行、「善鸞義絶状と偽作説」、『史敏』第 3 号、1～18 頁、2006 年、査読無
⑪平雅行、「法然上人とその時代(前編)」、『知恩』第 745 号、6～19 頁、2006 年、査読無
⑫平雅行、「法然上人とその時代(後編)」、『知恩』第 746 号、6～19 頁、2006 年、査読無
⑬平雅行、「鎌倉幕府の将軍祈祷に関する一史料」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 47 号、1～41 頁、2007 年、査読無
⑭平雅行、「中世史像の変化と鎌倉仏教(1)」、『じっきょう—地歴・公民科資料』第 65 号、1～5 頁、2007 年、査読無
⑮平雅行、「中世史像の変化と鎌倉仏教(2)」、『じっきょう—地歴・公民科資料』第 66 号、1～5 頁、2008 年、査読無
⑯勝浦令子、「日本古代における外来信仰系産穢認識の影響—本草書と密教経典の分析を中心に—」『史論』第 60 号、28～45 頁、2007 年、査読無
⑰勝浦令子、「古代・中世前期出産儀礼における医師・医書の役割」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第 141 集、7～39 頁、2008 年、査読有
⑱勝浦令子、「女性と穢れ観」、『佛教史学研究』第 51 巻 2 号、2009 年、査読有
⑲牛山佳幸、「モンゴル襲来前後の時期における地域社会と仏教」、『佛教史学研究』第 49 巻 1 号、2006 年、査読有
⑳牛山佳幸、「歴史学から見た中世寺院：中世の尼寺」、『季刊考古学』第 97 号、2006 年、査読無
㉑吉田　一彦、「天寿国曼荼羅繍帳銘文の人名表記」、『アリーナ』第 5 号　236～249 頁、2008 年、査読無
㉒原口志津子、「善徳寺所蔵の女性に関わる書画と展示の事例」、『富山県立大学紀要』第 17 巻、114～124 頁、2007 年、査読無
㉓原口志津子、「高岡・大法寺所蔵新出五幅対について」『富山県立大学紀要』第 18 巻、97～110 頁、2008 年、査読無
㉔原田正俊、「九条道家の東福寺と円爾」『季刊日本思想史』第 68 号、78～97 頁、2006 年、査読無
㉕原田正俊、「南北朝・室町時代の大乗寺・永光寺・總持寺」『駒澤大学仏教学部論集』第 37 号、43～60 頁、2006 年、査読無
㉖原田正俊、「中世仏教再編期としての 14 世紀」、『日本史研究』第 540 号、40～65 頁、2007 年、査読有
㉗原田正俊、「日本中世の禅宗と葬儀」『韓国仏教国際学会報告集』韓国東国大学、2008 年、査読無
㉘岡村喜史、「中世末期大和平野北部における真宗の伝播—興正寺系の展開を中心に—」『龍谷史壇』、第 127 号 1～14 頁、2007 年、査読無
㉙佐藤　文子、「京都本願寺の境内地をめぐって」、朝日新聞社編『本願寺展』、朝日新聞社、227～235 頁、2008 年、査読無
㉚松浦　典弘、「敦煌尼僧関係文書管見」、『敦煌写本研究年報』創刊号、137～144 頁、2007 年、査読無
㉛松浦　典弘、「墓誌から見た唐代の尼僧と家」『仏教史学研究』第 50 巻—1 号、1～19 頁、2007 年、査読有
㉜松浦　典弘、「長興 4 年中興殿応聖節講経文をめぐる問題について」、『敦煌写本研究年報』第 2 号、83～90 頁、2008 年、査読無

〔学会発表〕(計 19 件)

①西口順子、「女性と仏教研究と日本仏教史」
②勝浦令子、「女性と穢れ観」
③牛山佳幸、「女人禁制の日本的展開」

④高木博志、「古典文学と近代京都ー名所の女性化」
⑤松浦典弘、「唐代女性の出家形態 ―寺院との関係を中心にー」
⑥佐藤文子、「優婆夷から聖へ」
⑦平雅行、「出家と女性」
⑧原田正俊、「禅宗の尼寺と女性」
⑨岡佳子、「近世比丘尼御所の組織」
⑩吉田一彦、「天寿国曼荼羅繡帳と女性」
⑪原口志津子、「 法華経曼荼羅と女人成仏」
①～⑪国際シンポジウム“BEYOND BUDDHOLOOGUY:NEW DIRECTION IN THE STUDY OF BUDDHISM”2 日目“WOMEN AND THE HISTORY OF JAPANESE BUDDHISM”米国ハーバード大学、2007 年 11 月 2 日
⑫牛山佳幸、「田村麻呂伝承の成立と展開―信濃国の事例から―」、2006 年度日本宗教史懇話会サマーセミナー、於香川県坂出簡易保険保養センター、2006 年 8 月
⑬牛山佳幸、「善光寺如来と女人救済」、特別公開講座『最新善光寺学』、於長野県カルチャーセンター、2007 年 7 月
⑭牛山佳幸、「女性と祈り―戸隠と女人禁制の問題をめぐって―」、戸隠遊行夏季大学、於戸隠中社横倉旅館、2007 年 9 月
⑮牛山佳幸、「信濃から見た山岳信仰の相互交流、」第 29 回日本山岳修験学会妙高学術大会、於新潟県妙高市妙高高原メッセ、2008 年 11 月
⑯牛山佳幸、「平安時代の善光寺をめぐって―霊場寺院への発展とその背景―」、長野市古文書館開館 1 周年記念講演会、於長野市公文書館、2008 年 11 月
⑰牛山佳幸、「善光寺如来と女人救済」第 19 回日本性機能学会東部総会特別講演、於ホテルメトロポリタン長野、2009 年 2 月
⑱原口志津子、「『吹抜屋台』について―源氏物語絵巻を中心として―」、京都大学文学研究科国際シンポジウム「世界の中の『源氏物語』―その普遍性と現代性―」(GCOE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」共催/京大以文会協賛)、於京都大学、2008 年 12 月
⑲松浦典弘、「晋城硤石山青蓮寺所蔵の唐碑」、中国石刻合同研究会、於明治大学、2008 年 7 月

〔図書〕(計 20 件)
①岡佳子、『美術商の百年東京美術倶楽部百年史』第 1 章「寛永文化のなかの唐物屋」、東京美術倶楽部、59～88 頁、2006 年
②岡佳子、『平成 18～20 年度、科学研究費補助金(基盤研究(Ｂ))研究成果報告書日本の宗教とジェンダーに関する国際総合研究―尼寺調査の成果を基礎として Ⅰ本文編』・『同 Ⅱ霊鑑寺目録』・『同 Ⅲ中宮寺目録』・『同 Ⅳ慈受院目録』 (編・発行)、Ⅰ全 202 頁 Ⅱ全 211 頁 Ⅲ全 282 頁 Ⅳ259 頁、2009 年
③杣田善雄、『史料纂集 古記録編 妙法院日次記』第 22 巻(史料校訂)、妙法院史研究会編、全 439 頁、八木書店、2008 年
④平雅行、「親鸞の配流と奏状」『親鸞門流の世界』法蔵館、175～208 頁、2008 年
⑤平雅行、「神国日本と仏国日本」『世界史を書き直す 日本史を書き直す』和泉書院、113～146 頁、2008 年
⑥勝浦令子、「仏教と経典」、吉川真司他編『列島の古代史』第 7 巻信仰と世界観、岩波書店、51～88 頁、2006 年
⑦勝浦令子、「『源氏物語』の出家」、小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』、竹林舎、434～448 頁、2007 年
⑧勝浦令子、「『三宝絵』西院阿難悔過―尼寺仏事の系譜―」、小島孝之ほか編『三宝絵を読む』、吉川弘文館、99～123 頁、2008
⑨牛山佳幸、「田村麻呂伝説と清水寺信仰―とくに信濃における成立時期とその背景―」、速水侑編『日本社会における仏と神』吉川弘文館、2006 年
⑩牛山佳幸、『若澤寺を探る Ⅴ 若澤寺跡調査報告書２』(共著)長野県波田町教育委会編刊、2007 年
⑪牛山佳幸、『朝日ビジュアルシリーズ 週刊仏教新発見 16 善光寺』(共著)朝日新聞社、2007 年
⑫牛山佳幸、「善光寺信仰と女人救済―主として中世における―」『論集 東国信濃の古代中世史』(井原今朝男と共編著)、岩田書院、2008 年
⑬吉田一彦、『民衆の古代史―『日本霊異記』に見るもう一つの古代』(単著)、風媒館、全 260 頁、2006 年
⑭吉田一彦、『古代仏教をよみなおす』(単著)、吉川弘文館、全 249 頁、2006 年
⑮高木博志、「明治維新と賀茂祭」、山喬平監修『上賀茂のもり・やしろ・まつり』、思文閣出版、192～210 頁、2006 年
⑯原田 正俊、「京都五山禅林の景観と機能」、五味文彦等編『中世寺院 暴力と景観』、高志書院、247～270 頁、2007 年
⑰原田 正俊、「五山僧の「文官」的性格」、笠谷和比古編『公家と武家Ⅳ 官僚制と封建制の比較文明史的考察』、思文閣出版、139～158 頁、2007 年
⑱原田 正俊、「仏教と太平記」、市沢哲編『太平記を読む』、吉川弘文館、112～130 頁、2008 年
⑲岡村喜史、「本願寺門前町の成立」、『京都の門前町と地域自立』、晃洋書房、1～11 頁 2007 年
⑳岡村喜史、『大系真宗史料 文書記録編６「蓮如御文」』(史料校訂)、法蔵館、 全 470

頁、2008 年

６．研究組織

(1)研究代表者

岡 佳子(OKA YOSHIKO)
大手前大学・総合文化学部・准教授
50278769

(2)研究分担者

牧野　宏子(MAKINO　HIROKO)
関東学院大学・人間環境学部・准教授
50219309

平 雅行(TAIRA　MASAYUKI)
大阪大学・文学研究科・教授
10171399

勝浦 令子(KATSUURA　NORIKO)
東京女子大学・文理学部・教授
30185821

牛山 佳幸(USHIYAMA　YOSHIYUKI)
信州大学・教育学部・教授
60176659

吉田 一彦(YOSHIDA　KAZUHIKO)
名古屋市立大学・人文社会系研究科・教授
40230726

高木 博志(TAKAGI　HIROSHI)
京都大学・人文科学研究所・准教授
32020146

原口 志津子(HARAGUCH　ISHIZUKO)
富山県立大学・工学部・教授
40208666

原田 正俊(HARADA　MASATOSHI)
関西大学・文学部・教授
40278883

岡村 喜史 (OKAMURA　YOSHIJI)
龍谷大学・文学部・准教授
50340493

松浦 典弘(MATUURA　NORIHIRO)
大手前大学・総合文化学部・准教授
80319813

切畑 健(KIRIHATA　KEN)
大手前大学・非常勤講師
80000363
(2006 年度のみ研究分担者)

西口　順子(NISHIGUCHI　JUNKO)
相愛大学・名誉教授
80237685
(2006・2007 年度 研究分担者)

杣田 善雄(SOMADA　YOSHIO)
大手前大学・総合文化学部・准教授
20368442
(2006・2007 年度 研究分担者)

佐藤 文子 (SATO　FUMIKO)
仏教大学・非常勤講師
80411122
(2006・2007 年度 研究分担者)

(3)連携研究者

西口　順子(NISHIGUCHI　JUNKO)
相愛大学・名誉教授
80237685

杣田 善雄(SOMADA　YOSHIO)
大手前大学・総合文化学部・准教授
20368442

佐藤 文子 (SATO　FUMIKO)
仏教大学・非常勤講師
80411122

岸本 香織(KISHIMOTO　KAORI)
京都造形芸術大学・非常勤講師
40440903